

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 蓮田隆志	提出日：平成22年3月22日
東南アジア研究所における職名：非常勤研究員 *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師—助教—助手—ポスドク・博士課程学生—修士課程学生—学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパート名)： 国名：オーストラリア 機関名：オーストラリア国立大学アジア・太平洋研究院アジア学部 カウンターパート名：リ・タナ Li Tana *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・研究機関—企業—その他)	
派遣期間：平成22年3月8日 ～ 平成22年3月14日 (派遣日数：7日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) ①研究・実験、②フィールドワーク、③セミナー、④インターンシップ、⑤サマースクール等の講習、⑥学会出席、⑦単位取得等、⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい) ①人文学、②社会科学、③数物系科学、④化学、⑤工学、⑥生物学、⑦農学、⑧医歯薬学、⑨総合領域、⑩複合新領域	
派遣の概要(500～700字程度) グローバル化の進展は、移民や出稼ぎ労働者といった形での人の流動性を大きく高めている。従来の移動する人々を外来者と位置づけ、地域の外在的要素と見なす理解は根本的な修正を迫られている。人々の国境や文化圏を越えた移動を組み込んだ地域理解の枠組みが求められているが、これは分析概念の更新という学問的要請というよりも、現代社会そのものの変動を理解するための現実的課題である。このような新たな枠組みの構築において、歴史的に人の流動性が高かった東南アジアは、長期的・歴史的な文脈からこの問題に取り組むことができる点で優位性を持っている。報告者は、地域としてはベトナム、主題としては地域社会・伝統社会の形成に的を絞ってこの問題を考究し、そこから東南アジア地域社会の形成過程を分析し、東南アジア発の社会発展モデルとして提示することを目指す。 派遣先のオーストラリア国立大学アジア・太平洋研究院アジア学部はオーストラリア随一の研究機関であり、多数の専門家を擁する。直接の研究対象であるベトナムについても、複数のベトナム史研究者が所属しており、専門家が各地に分散している日本では難しい高度で密度の高い議論を集中的に行うことができる。 今回の派遣は、報告者未訪問となる渡航先機関の状況確認及び関係者との顔合わせ・事前打ち合わせを目的とするものである。正味4日間の滞在で、カウンターパートを含めた学部所属のベトナム研究関係者4名と面会して報告者の研究テーマについて議論し、また学部長のケント・アンダーソン教授と面会して受け入れの可否、その際の研究環境などについて打ち合わせを行った。	
事業に係る研究成果(500～700字程度) アジア・太平洋研究院院長兼アジア学部長のケント・アンダーソン教授(日本研究)と面会し、受入について打ち合わせを行った。アンダーソン教授からは、Visiting fellow もしくはそれに準ずる資格での同学部への滞在中に問題がなく歓迎すること、デスク・書棚・インターネットアクセスなどについても提供可能との回答を得た。また、事前にプログラム全体および報告者の研究目的についてもメールにて説明していたため、事前に報告者の研究と関連のある同研究院の関係研究者について教示を受けた。その中には、報告者と面識のない研究者も含まれており非常に有益な打ち合わせとなった。 ベトナム研究者3名、ベトナム研究の博士候補生3名の紹介を受けた。また、運良く学部の朝茶会に参加を許され、事務関係者やベトナム以外の東南アジア研究者とも本プログラムについて意見交換する機会を得て、好意的反応を得た。さらに本学部には2名の日本人教員、3名の日本人博士候補生が在籍しており、彼らからキャンベラ滞在中のアドバイスを受けた。現在、キャンベラでは空き室不足らしく、家賃相場が高止まりしていることなど、研究とは関連しないものの滞在中にあたって不可欠な情報も得られた。	